

造林・保護

(第一会場)

日田の林業について

日田地方事務所林業課長

宮川 象三

一. 位置及地勢

日田郡市は大分縣の南端にありて九州の路中央部に在す。東西約20料、南北約48料に亘り、面積約65,000畝、一市十二ヶ村に区割せられ戸數16,956戸、人口96,434人を擁す。日田新線を以て区割せられ、所謂日田盆地を形成し、北は兵彦山々脈を貫き、岳城鬼山、大將神山、一尺八寸山等連亘して下毛郡と接し、東は玖珠郡界に月出山嶽、龜石山あり、南は尾ノ岳、矢戸嶽、三國山等により熊本縣に接す。西は檜敷山、禊庭嶽、権現嶽、浪渡山、岳井嶽、針目山等により福岡縣に接す。其の地郡内に伊奈山、尹山、大河山、渡神嶽、若呑童子山、五嶽殿等ありて約500乃至1230米の山嶽密著し地形急峻なり。河川は兵彦山々脈の岳城鬼山に源を發する小野川は南流して有田川と合し花月川となり尤西にて三隈川と合す。又尾ノ岳に源を發する川原川は折原に至り三國山より發する津江川に合し更に禊庭に於て熊本縣小国より流下する杖立川と合し大山川となり糸石川を加えて日田市小淵町に於て玖珠郡九重山に源を發する玖珠川と合流し三隈川となり、更に新瀬川を加えて日田盆地の底面を流下し花月川と合し筑後川となり、西流して福岡縣に入り遂に有明海に注ぐ。此の管内に於ける延長約52料、水運要にして水運便なり、平地として見るべきは日田平野にして中に月隈、權隈、日隈の三つの丘ありて舞臺の地を形成す。日田市は此の平野の中央にありて特有の市街地をなし、人口約五万大分縣第四位の都市なり、郡内産物産の集散地として或は又觀光都市として其の面目を一新しつつあり。

二. 地質、土壤及氣象

日田地方に於ける基岩は阿蘇火山系の安山岩を主とし、中央の日田盆地は昔湖水の乾涸せるものとの伝説ありて地質は沖積層に亘り、其の間固高台地は洪積層より成る。土壤は概ね阿蘇火山系の噴出凝灰質廢土にして「三隈土層」と稱せられ腐植質に富み地味肥沃なり。一般に石礫を混する事多く、従つて木の生育に適するものと認爲される。氣候は概して溫和なりと雖も夏季に於ては最高三十五度に達し、冬季零下十度に及ぶことあり。殊に熊本縣界に接する津江地方の山前部は降雪多く寒氣亦強し、森林産物帯は暖帯南部に亘り、禊庭嶽、権現嶽、若呑童子山及岳城鬼山に於て800米以上の箇所は「スナ」を産出。日田平野は地勢87米に過ぎざるを以て降雪降雪共に比較的少く氣候溫和なり。西風に送られ来る茅渾の氣流は日田盆地に入り四面の山岳に接して濕度を激増し、秋冬には地上近く霧霧を主する。之れ日田の「霧霧」として尋常なり、過去五ヶ年尙の年平均新雪、湿度、降水量は大の如し。

傾 斜 (攝氏)

14.1

濕 度 (%)

81.1

降水量 (米)

1,806.2

三 林野の概況

日田平野を除く山向部は平地少く耕地も甚だ乏なり。従つて皆より部落附近の山地に於ては切替畑、焼畑等盛んに行われて天然の林相は漸次その跡を絶ちつゝあり。尚此時植林策の勃興によりて焼畑の跡地には殆ど杉を植栽せる結果、広葉樹林は年々減少し漸時杉林を以て蔽わるゝに至れり。

今日田郡市の私有林野面積及蓄積を示せば次の如し。

種 別	針 葉 樹	広 葉 樹	竹 林	伐 跡 地	原 野	計
面 積 (町)	33,328	2,909	1,921	3,414	11,799	59,371
蓄 積 (石)	8,259,281	1,357,434	909,082			9,616,715

上の外国有林2,639町亦あり。尚原野は主として牧收地、採草地であるが、之を整理すれば相当面積の植林が出来得るものと懸念される。

四 日田林業の起源及発達史

民間林業の首位にありと云わるゝ吉野よりも植林面積に於て広大で豊に於て日本一と稱せらるゝ。日田地方の林業は左程古くから基礎づけられていたのではなく、徳川幕末此方の僻地であるに不利、文化の進歩は割合に早く、従つて林業智識の普及せられたのも主として此の時代であるといわれる。又本郡市に於て国有林の比較的少きは古くより山林に対する価値を認め、個人に於て其の所有を確保した結果であるとするを得べし。然るに之が発達沿革等については確實なる記録等なく其の調査は甚だ困難なるが旧家の手記、記録及口碑の伝える等を綜合すると日田地方の人工造林は凡200年程以前より始まりしもの、如く、其後僅かに篤志家、富豪等一部の個人により小面積の植林せるものと懸念される。造林事業が漸く盛んになりしは明治維新以後、材産の昂騰により林業が有望なる事と、治山治水の重大なるを藉り漸次植林を企図する者が増加し、日清戦争以後に於て着しく進歩を更、更に日露戦争後に於ける材産の暴騰は愈々林業熱を高潮せしめたるが以上の背景は外部経済の及ぼしたる結果に起因すると雖も又本郡市が總ての要素に於て如何に天恵的植林適地であるかを如実に示すものと言ひ得べし。然るに大東亜戦争に至るや濫伐濫伐を重ね、一方、造林は停頓し爲に山野は荒蕪し不時の大洪水による被害は相当額を示せり。終戦後に於ても戦時中の樺柱に加え野銀の高騰、資金難、山林所有五町歩制限の目録、未墾地の開拓等々に依り造林事業は全く憂慮される情勢となりたるも、其の後造林補助金政策、森林復興運動の激進等により新植面積も年々上昇の一途を辿りつゝあり。最近三年間の新植面積を示せば次の如し。

昭和23年度

910町歩

昭和24年度

1,110 "

昭和25年度

1,400 "

五、旧田林業の特徴

旧田地方に於ける林業の特徴とする處は用材の生産を主目標とする榎木苗に依る杉の造林なり。ヒノキマツの造林は極少にして殆んど杉を主とする。杉の榎木造林は山比榎林と床榎苗に依る造林との二方法にして約40年前迄は殆んど直挿造林が行われたるも、其後床榎苗による造林法に及び現在にては津江方面の一部を除き大部分床榎造林が行われ居り。

ヒノキ苗養成法の革新について

鹿屋営林署 楠本 司

我が九州に於ける、造林法の特徴を尋ねる人があつたならば、吾々は笑口同音に、それはスギの榎木造林であると答ふるで可いでしょう。

然るに、これ迄ヒノキは専ら実生苗を養成して造林して参つたのでありますが、ヒノキの種子は善苗の産あり、種子の採取は割に善好し、適地適木を目標とした養苗計画が中々むづかしいのであります。

又、初より種子の採取は出来ても、まさ付や、床苗、培養などの止争が中々面倒でありまして、経費も相当高く、養苗の両長喜には優され勝りし、又、山出の期間には少くとも二年を要しますので、ヒノキ実生苗養成は、造林用苗木養成の中で、最も手数を要するもの、一つであります。そこで私はスギと同時ヒノキ榎木苗の養成を爲し、25年度から本格的に開始したのであります。

先ず、ヒノキ榎木苗養成の長所を述べますと、次の如きであります。

- (1) ヒノキ苗木は、スギ榎木と同様、九州の気候條件に適した方法である。
- (2) ヒノキ種子を全数採取出来ない時も、養成することが出来る。
- (3) ヒノキの優良品種のみを養成することが出来る。
- (4) 榎木方法が簡便で、養苗費が比較的低廉である。
- (5) 榎木は小さいものを採取するから、母樹を衰弱することが少く、又1本の母樹から20〜30本も採取することが出来る。
- (6) 1年間で山出するから、養苗計画が簡便である。

次にヒノキ榎木の試験結果と、実行経緯を述べることに、致します。

先づ私は、ヒノキ榎木を本格的に実施する前駆として昭和25年3月高崎営林署大迫苗圃で、ヒノキ榎木試験を行いました。此はヒノキ苗木の樹冠上半部の丈夫さうな穂をとり、長さ22cm内外、重さ6g内外の太さとし、之を100粒挿付し、毎日に日覆を2枚重ねてと